
三題噺 「赤色」「冷蔵庫」「希薄な目的」

柄卯鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三題噺 「赤色」 「冷蔵庫」 「希薄な目的」

【Nコード】

N3841Q

【作者名】

柄卯鳥

【あらすじ】

三題噺 「赤色」 「冷蔵庫」 「希薄な目的」

「赤色の家具が欲しい！」

「……は？」

家に帰ってくるや否や、目の前に座っていた彼女は立ち上がり、声高らかに宣言した。……さすがに、呆氣に取られる。

「実はね！ 昨日風水の番組をやったの！」

「ああ……なるほど」

呆氣に取られながらも、その一言で理解してしまった。つまり彼女は――

「分かってくれた！？ というわけで、あなたの家の流れを悪くするために赤色の家具を買いに行こうっ！」

——自分の家の運気を良くするために赤色の家具を……と思っていたのに、まさか俺への攻撃材料を買いに行こうとしていたとは……。

「……いや、いかねえよ」

「なんで!？」

「なんでとな!？」

さすがにその驚きに驚いてしまう。

「いやいや常識的に考えろよ。普通に考えろよ。俺の運気を下げたためのものをどうして俺が買いに行かなきゃならん」

「え？ 買うのは私だけど」

「そうじゃなくて……ああもういいや。で、その買ってきた物は、どこに置くんだ？」

「キミの家。具体的に言うところの部屋の……」

「ああ、いらぬいらぬ。っつか、自分で言っただけ違和感持てよ」

「……？」

「首を傾げるだけの反応はおかしいだろ……」

軽く、自分の額を押さえてしまう。

「え？ でも確かキミって、そういうの信じてないよね？」

立ち上がった姿勢のまま体を前に倒し、額を押さえていた俺の顔を覗きこんでくる。……止める。そんな前屈みになっただけならお前の胸元に視線がいつちまうだろ。膝に手を置いて強調してるのはワザとじゃねえんだろうけど……正直困る。

「だから別に良いじゃん」

「信じてないけど良いってことにはならんだろ」

続いてきた言葉に、彼女の方を見向きもせず反論。

「ほら、あれだ。幽霊とかと一緒にだ。信じちゃいないけど怖いっていう、アレと」

「私信じてるもん、幽霊」

「そう言えばそうだったなあ……いやでもお前、俺とは違って風水も信じてるんだよね？ だったら俺を不幸にするためにソレを買いに行くって……酷い話だと思わないか？」

「え？ そう？」

「どう考えてもおかしいだろ！」

主に、コイツの頭の中が。

「おかしくないって。一緒に家具を買おうってだけの話じゃん」

「俺を不運にさせようって部分がおかしすぎるだろ……」

「じゃあとりあえず、私の家に置くものってことで良いから」

「とりあえずの時点で色々おかしくね？」

「おかしくない」

「いやおかしいから！」

「もう……何意固地になってるの？」

「え？ コレって意固地とは違うくね？」

「違うない」

「……ええ……」

「どうせ今日家にいたって何もしないんでしょっ？」

「……んまあ、そうだけど……ってあれ？ 何か会話の流れがぶつ切りになってないか？ この流れで今日の俺の予定はおかしいだろ」
「おかしくないよ。で、予定無いんでしょ？ だったら良いじゃん。」

行こうよ」

「ああ……」

……まあ、別に良いか。それにコイツがこうやって無理矢理話題を持ってきた場合、その持ってきた話題が本題で、それまでの単なる照れ隠しってことだからな……。

「……分かったよ」

つまりはま、彼女は俺と出かけたと思ってくれてる訳で……そんなの知ったら、断れねえわな。

「いえーい！　じゃあほら！　さっさと準備する！」

「いやまあ、準備するも何も、俺帰ってきたばっかだからこのまま出られるし……」

荷物を置いて落ち着こうと思ったらすぐ乗り込んできたからな……落ち着くも何もねえって。

「で、買うつて言つても、何を買うつつもりなんだ？」

「家具」

アパートを出て、とりあえず歩いて五分も経たない場所にあるホームセンターへと二人並んで向かいながら訊ねてみると、そんなアバウトな答えが帰ってきた。

「いや、それは分かつてるけどさ……どんな家具を買ったって話だよ」

呆れ半分で呟きながら、自分の家の間取りを思い浮かべる。

四畳半の1DK。駅から遠く、部屋の壁には生活に支障が無い程度の傷が沢山あり、玄関のドアの開け閉めにも錆付いた音が響く、他の住人に出かけたことを安易に知らしめるため安かった、俺の住んでいるその物件。部屋自体はまあ、フローリングの床の上に、ベッドとパソコンと本棚しかない、簡素なものになっている。……俺があまり部屋に物をおかない主義のせいだろうけど……でも、そ

の部屋の中に家具を置くって言ってもな……。

「正直、俺の部屋に必要な家具ってねえだろ」

家電ならまあ、電子レンジとか炊飯器とか、あった方が便利なのかもしれないが。そしたら家に帰ったらコンビ二弁当ばかりの生活から脱却して、スーパーの惣菜やら冷凍食品やらを食うことも出来るようになるし。

「無いけど、赤い家具が欲しいの」

断言ですか。

「そこまでして俺を不幸にしたいのか……」

「別にそういう訳じゃないけど……」

「じゃあどういう訳なんだよ」

「実は……その……赤い家具が無いと、困るの……」

「え……？ あ、何？ もしかしてアレか？ 実は無いと俺が不幸になるとか、そういう類なのか？」

「そう思ったら、キミも買ってくれるでしょ？」

「って俺の気持ち一つかよ！」

「うん。でもキミの家におかないといけないものであることに変わりはないよ！」

「不幸になるものをおかないといけないってどういう状況だよ！」

ツンデレ的な要素かと思いきや……本当に俺の不運を招くためだったとは……！ 一瞬でもプラスに考えたら負けてきた。

「ほら、キミが不幸になったら、私が相対的に幸運になるから」

「笑顔でとんでもないこと言ってきたーっ！」

俺の不幸が蜜の味だとも言うつもりか……！ なんてヤツだ！

「ともかくそういう訳だから。ほらっ、早くいこっ」

「行こうって気分になんてなれるかっ！」

なんてツツコミをしていようと、歩いていけばいずれは辿り着く訳で……。

もうすでに、見せの看板が見えてきていた。

「ああ……ただいまあ……」

「うん、おかえり！」

「って、お前も一緒に行っただろ」

「うん、だからキミも」

「ああ……おかえり」

「うん、ただいま！」

なんてやり取りを、俺の家に帰って来て、玄関先で靴を脱ぎながら行く。

「……って俺の家じゃん。お前がただいまはおかしいだろ」

「そうでもないよ？ 私と一緒にこの家から出ておでかけしたんだし」

「どういう理屈だよ……」

ボヤクように呟きながら、例の四畳半の部屋へと足を踏み入れ、ハンガーへと自分のコートをかける。

それに倣うように、彼女もまた俺の隣にあるハンガーを手に取り、コートをかける。

「図々しいなあ、オイ」

「えへへ……」

何がおかしいのやら……。

「ふう……」

……ま、ともかく、ようやく一息だ。机も何も無い部屋で、ベッドに背中を預けて座り込む。

そしてその隣に、彼女もまた座ってくる。肩に触れるか触れないかの距離で。

「……………」

……気にするだけ負け、か。彼女は気にもしてないだろうし。

「そう言えば結局、家具は買わなかったな」

「うーん……良いのが無かったしね」

俺の言葉にそう、残念そうに返事をしてくる。

そう……結局は、何も買わなかった。手ぶらで帰ってきたのは、決して、発送を頼んだからでも何でもなくて……彼女自身が、もう良いや、と言ったからだった。

「また今度、もうちょつと都会の方に出て、大きなところで買つか」

「うん……ソレも良いかな」

「は？」

「なんて言うのかなあ……ちよつと、らしくなかったかもしんないらしくなかった？ 何がだろう。」

「こんな手段に頼るのが——言いたいことをいうのに他の事に頼るのが、らしくなかったかもしんない」

「……………」

言葉の意味が分からず、思わず黙ってしまう。黙って、隣に座っている彼女を見つめてしまう。……その、視線に気付いたのだろう。彼女もまた、俺のほうへと首を向ける。……互いに、吐息がかかりそうな距離で、見詰め合う。

「……私ね、寂しかったの」

その、言葉通り……文字通り、彼女は寂しそうな表情を浮かべ、少しだけ恥ずかしそうに頬を染め、言葉を続けてくる。

「キミが隣にいないくて。私の隣から生活感がなくて。だから……こんなことしようとしちゃったの……」

「……いや、理由に繋がりが見えないんだけど……」

「まあ、普通そうだよね」

言って、苦笑い。

「赤い家具がある場所に置くと、その家から離れることになっちゃうんだって。だから、良い物件に当たったと思ったら注意しろってさ」

「いやだから——」

「まあまあ、最後まで最後まで。……でね、それならキミの家にその家具を置いたら、キミが家から出て行くことになるでしょ？ そ

したらキミは、私を頼ってくれるかなって、そう思ったの」

「……………」

「そして後は……私の家に一緒に住まない？　って私が聞いて、キミが了承して……それで終わり。一緒に住むことになって、ハッピーエンド。……そんな考えをしてたの」

「……恐ろしいな」

「でしょ？」

「いや、何が恐ろしいって……家具が云々風水どこのこののじゃないって……」

一つ、間を置いて、言葉を紡ぐ。

「……俺とお前、そもそも付き合ってもねえじゃん」

「……………」

「……………」

「……えへへ」

「いや何がおかしいんだよ！」

凍った空気を裂かんばかりに、思わず全力でツツコむ。

「そもそもそういうのって付き合ってる恋人同士の悩みじゃね！？　俺たち付き合ってもねえって話だよな！？　そうだよな！？」

「まあ、そうだよな」

「だよな！？　うつわ……あぶねえ……てつきり俺が脳の病氣なのかと思っただ……！　うつわ……！」

そもそも俺と彼女の関係は、高校の頃の同級生で、大学で別れて社会人になってから偶然アパートの部屋が隣同士ってことで再会して、そしたら馬の合う話し相手になってたっただけの……そんな関係だ。そろそろ互いに四捨五入すれば三十路間際の、そんな年齢を歩く間柄なだけの関係だ。それをまあ恋人同士みたいな気分になっ
て……。

「でも、寂しかったのは本当」

年齢に似合わない喋り方、けれども年齢とは合致しない若々しい見た目に合致した喋り方で、さつきよりも一層真摯な瞳を向けて……潤んだ瞳を向けて、続けてくる。

「よく話すようになって、安心できる相手になって……そう思ってたなら、キミは海外にばかり行くようになって……そしたらやっぱり、寂しくて……隣の部屋から、何も聞こえてこなくて……安心する物音が一つもしなくて……今日、久しぶりに、隣から玄関の開く音がして……嬉しくて……」

「……………」

そんな泣きそうな顔で言われたら、たまったものじゃない。

心の中がかき乱されて、苦しくなってくるじゃないか。

「……はあ……」

ため息……のように、大きく息を吐き出す。……こんな姿を見たら、やっぱりさ……色々と、決心がついちまう訳よ……。

「あの、さ……」

「うん……？」

「俺さ、実は……お前のこと、好きなんだよ。昔から」

言った。言ってやった。胸がうるさく鳴り響く中、言ってやった。「だからこの部屋もずっと契約したまま置いてたんだよ。何ヶ月も住んでないのに安いとはいえ家賃なんて払い続けてたんだよ。……気持ち悪いかもしれないけど、お前との繋がりとか……そういうの、少しでも持って、向こうに行きたかったんだよ」

連絡先は確かに交換している。でも、イザ日本に帰ってきたとき、彼氏彼女も出ない、ただの好きな人の家をいきなり訪れるのは……ただバカだ。

「今日帰ってきたのだって、お前がまだ隣に住んでたら良いなって思ってたからなんだよ。お前と話したいなって思ったからなんだよ。本当は実家に顔出すべきなんだろうけど……でも俺は、それ以上に、お前と話がしたかったんだよ」

もし帰って来て、隣に住んでいるのが別人だったり空き部屋だっ

たりしたのなら…… スッパリと、諦められた。

でもどうだ？ 現実には。彼女はまだ、隣に住んでいてくれた。しかも俺と話が出来なくなつて寂しいとまで言ってくれた。そうならもう…… 自分の気持ちを、打ち明けるしかないじゃないか。向こうに行っている間に積もり積もつた…… 消えることのなかった…… さらに増大していた、この気持ちを。

「……でも……」

と、俺の気持ちを聞いてくれた彼女は、俯き、表情を見せないようにして、言葉を続けてくる。

「私と付き合ってくれても…… キミはまた、すぐに日本を発つんだよね？」

「……ん…… まあ、そういう仕事だし……」

「だったら…… 付き合うのは、イヤ」

「……そう、か……」

……ま、そうだよな……。そもそも彼女だって、寂しいのはイヤだって言ってたもん。だからこそ俺と一緒に住もうとして――

「私の家、冷蔵庫がないの」

「――は？」

何の話だ？ 突然。

「だから…… キミの部屋にある冷蔵庫が、使いたいの」

「……はあ……」

「だから…… あなたのこの部屋に、引っ越してきても、良い？」

「……え？」

「もう…… 隣同士とか、偶然再会した同級生とか、そんな絆はイヤ。切れそうな、寂しくなる絆は、イヤ。だから…… どうせだったら、一息飛ばした関係になりたい。強い強い絆の關係に、になりたい」

……いやいや、俺たち風水だなんて希薄な目的で買い物に行ったぐらいしか、デート経験ないんだぞ？ それなのにか……？

なんて言葉を、俺が口にするよりも早く――

「私と、結婚して」

——俺よりも遥かに早く、プロポーズの言葉を、彼女は言ってきた。

「って早いな！」

「……ダメ？」

「うっ……」

ツッコミで誤魔化そうとしたのに……俯けていた顔を上げてのその上目遣いは反則だ……。

……まあ、俺もイヤって訳ではないし……彼女のことは、そりゃもちろん、好きだし……高校生の頃から好きだったし……嬉しい事だらけなんだけど……さすがに結婚は……気後れするな……。

「……」

……でも……彼女だって、同じ気持ちだろうしな……そんな中、頑張って言ってくれたんだし……せめて俺だって……真摯な気持ちで、返事をしないと……。

「……」

……よしっ！ 腹は括れた。言うぞ、言うぞ！ 言ってやるぞっ！
彼女のその、上目遣いの眼差しを、真正面から受け止めながら……

俺はようやく、口を開いた——

（後書き）

というわけで最後のオチを考えている間に時間切れ
今回は前回と違って書き足す時間も無かったぜ……
おかげで登場人物のキャラもまあ場面ごとにバラバラ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3841q/>

三題噺 「赤色」「冷蔵庫」「希薄な目的」

2011年2月2日23時40分発行